

水牛通信

VOL.6 NO.9
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす
水牛はたがやす
稲は音もくやす
育つ

また芸能界周遊日記 鎌田慧 2

「スター」日記 ⑥ 坂本龍一 4

家族・友だち日々の糧 ⑥ 志沢小夜子 6

料理がすべて ⑥ 田川律 8

本や人物往来記 ③ 笠原功三 10

たのしみがない ⑥ 高橋悠治 12

名僧・日記 高橋卓志 14

子供たち ⑥ 柳生まち子 16

行ったり来たり ⑥ 西山正啓 18

前略、ブタ草です 竹内晶子 20

ぼちぼちいこか 金野広美 22

ぼくが作った本 ⑥ 平野甲賀 24

わるいくせ ⑥ 八巻美恵 26

下手の横吹き笛日記 ⑥ 西沢幸彦 28

シヨオネツのハナアア 斎藤晴彦 30

ドンブリカット 柳生弦一郎

また芸能界周遊日記

7月16日 二時、渋谷公会堂の控室でチエツカーズに会う。これで彼らの取材は終り。この久留米出身の青少年たちの前途を祈るばかりである。

7月18日 渋谷の青生舎で保坂展人と会う。大增会館2Fというので、ビルを思い描いていたのだが、訪ねあてたのは、共産党本部のコンクリートの壁の下の、木賃アパートだった。彼は意気軒昂で、中卒ゲンキ印の見本である。

7月19日 十時四〇分。全日空札幌便。夕張へ。市役所へ行って、生活保護者がどれだけふえたか、をきく。北炭関係は下請が少しか、をきく。来年十月までは黒手帳(炭鉱離職者手帳)で十二万円ほどが入る。生活保護とほぼ同じ額。マイカー族が保護をもらうためにはクルマを手離さなければならぬ。クルマか生活保護か、その選択に迷っ

ているようだ。タクシの運転手によると、保険金目当ての偽装離婚がふえているとのこと。筑豊でよく聞いた話である。

夜、行きつけの一杯屋へ出かけると、またもや、ライオンのような顔をしたライオンズクラブ会員に会った。富山県から出て来て、クリーニング屋で成功した。彼は三井鉱山から派遣されている北炭・管財人の軍隊時代の部下。ある夜、一席もうけて探りを入れたところ、この炭鉱はやがて再開されるうなニュアンス、彼ばかりか町のひとだけはまだ再開に夢をつないでいる。それまで、もちこたえられない店は、ヨロイ戸を降してひっそりしている。ヨロイ戸だらけになるか、炭鉱再開が早い、ガマンくらべてである。

7月27日 ホテル・ニューオータニ。作詞家・売野雅勇の二回目の取材。
7月28日 新宿・厚生年金会館。CBSソニーのオーディション決戦大会。

全国からの応募者は十八万人！ミス二人。準ミス三人ほか四人を選んだ。一人に絞る自信がないようである。何が当るか、誰にもわからない時代なのだ。

7月29日 徹夜で週刊朝日の原稿。つづけてもう一本。二二時十分の船で三宅島へ。新日文の島の文学セミナー。船の中は閑散としていた。島についてから聞いた話だが、観光客たちは、噴火をおそれて敬遠しているらしい。噴火慣れしている島のひとの話によれば、溶岩のスピードは人間の足より遅いから心配ないそうである。

8月1日 銀座松竹。レオナルド熊に会う。ざっくばらんでイイ男。苦節三〇年にしては、眼に張りがある。売れっ子になったからであろう。

8月2日 十時。小田急玉川学園前集合。三菱化成研究所の見学。バイオテクノロジー。説明を受けてもさっぱり。午後、原宿で高平哲郎と会う。今

夜は最高」「笑っていいとも」などの構成者である。

8月5日 十一時五五分。全日空沖繩便。戸川純チャンに会うため。撮影現場につくと、彼女は籐椅子に腰かけて居眠りしていた。

8月8日 板橋区の都営住宅。レオナルド熊宅訪問。家賃は八千円強。今年の収入は五千万円を超える、とか。三年前は月収十万円だった。ヒョウタンから熊、である。

8月11日 徹夜でも原稿できず。午前中に練馬の東映撮影所へ行くのを忘れていた。ここでは、いま『Wの悲劇』の撮影中。主演は薬師丸ひろ子。なにを隠そう、ぼくは彼女のファンなのだ。緊張した。

午後、彼女に挨拶、やはりイイ子だ。夜 日本テレビ「今夜は最高」のスタジオ見学。テレビマンは、深夜まで立ちっ放しで働いている、ということを見。モノ書きは坐りつきり徹夜。

8月13日 また東映撮影所。夕方から一時間強、薬師丸ひろ子と面会。ちかくの西友の食堂まで一緒に歩いたが、誰もふりむかなかった。戸川純の場合、どこでもサインせめて大変だった。面白い現象である。

十三歳から、角川のテレビスポーツで大量に宣伝されながら、フツのことでいられるのは、神技である、本人の意識は「学生」。高校時代もまいに通学したとか、勤労少女である。人気におぼれない平常心は不思議だが、子どもころ、はしやぎすぎると、「調子に乗るな」とおばあちゃんに叱られていた。

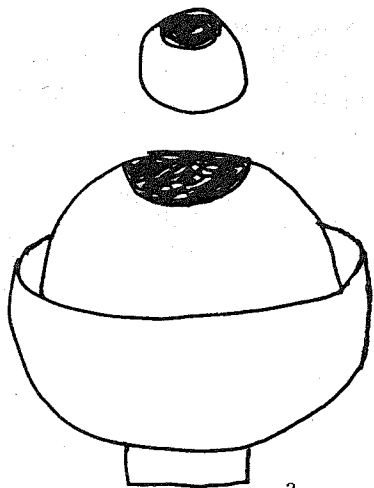
学校の話が多い。映画はもうひとつの義務教育とか。タイトルは、「薬師丸ひろ子のメインテーマは義務教育」というあたりか、もう一度、こんどは長時間やろう、といって別れる。

8月15日 前日から熊さんの原稿を書いて出来ず。週刊誌記事でこんな時間

をつぶしているバカはいなそう。喫茶店で編集者と会う約束していたのを想いだしたのは、三時間後だった。

芸能界おろおろ歩いて夏も去り

鎌田慧



「スター」日記

7月16日、12時、JCGLでヴィデオの打合わせ。JCGLはコンピュータでアニメを製作している。二次元の単純なアニメを画かせてもらう。3時半、音響で「写楽」の島本氏と原稿のチェック。その後ソロの録音。11時に録音を終え、シリンに行く。結局酒を飲んでしまつて帰宅5時。

7月17日、9時、美雨の泣き声で目が覚める。美雨が勝手にTVを点けて見ているのでAKKOに怒られた。「どうして？」ときくと、「思いがテレビにいつてしまう」という返事。ユニークな答で怒れない。2時半、交通会館で破傷風の予防注射。マラリヤは錠剤。3時、音響で録音。1時に終わり帰宅。7月18日、WAVEの隣のLAPISで文具を買う、これ僕の趣味。2時、音響IF「エル」で義江氏と打合わせ。

人々健康だわ。1時半終了、ぐつと自分を抑圧してダイレクトに帰宅。
7月24日、1時、品川プリンス1Fのティー・ルームで如月さんと打合わせ。1時半、東京検疫所で黄熱病の予防注射。係官にサインを3つ求められ、外にでるとタクシーから体育会学生風の人に「サカモトさん」と声をかけられる!? 2時半、音響。0時半終了、1時シリン。予防注射のことを忘れて酒を飲む。
7月25日、10時起床。12時、音響。7時、会議室で新レコード会社のミーティング。会社名はMIDIに決定。10時半終了。11時、シリン。義江氏とミーティング。2時終了。急いで帰宅、モドキの顔を見る為。そういえば今日発売の「写楽」にアシユラが載った。
7月26日、10時起床、12時音響。今日からリミックス、が機械のトラブルでなかなか進まず。11時半終了、やつと一曲リミックス。

3時、ソロの録音。

7月19日、1時、TV朝日7st。名のない音楽会「リハ。非常に心配ながら時間切れて音響へ。4時、浜口君が来てパーカッションを録れる。武邑氏に頂いたクロウリーの演説のテープの一部をCMIにサンプリングして録れる。非常にコワイ。

7月20日、2時、渋谷公会堂に入る。高橋アキさんと同室。楽屋で「水牛」の原稿を書く。4時、リハ。なかなかオケがなばっている。7時、本番。やつぱりあがる。女の子の客が多い。7時半。終了。リハの方が良かった。8時半、赤坂「ザクロ」で中上健次氏と対談、サムル・ノリのコンサート用パンプの為。中上氏遅れて来てちよこんと座り大きな身体を縮めてはみがかしそにひとを見る。やはり話は金属神、シャーマン……となる。10時、シリンで奥村氏にアルバム・ジャケット、ヴィデオ・その他のアート・ワークを

7月27日、1時音響。11時終了。一曲。12時シリンで鮎生君と撮影。篠山氏。なんとデルフィースがいる、びっくりした。だいたい日本語が話せるようになった。篠山さんと飲み回り、5時半帰宅。

7月28日、フラフラと起き出かける。12時音響。4時、浅田君、義江氏、奥村氏来る。さわりを聴いてもらい対談。昆虫、凶鑑、J・G・バラード、時間の停止した地中海の午後等々の話。アルバム・タイトルは「音楽凶鑑」にする。リミックスを続ける。2時半終了。7月29日、OFF。夜、風太達と花火をする。

7月30日、12時音響。6時、糸井氏、義江氏、奥村氏等来る。食事しながら対談。0時すぎAKKOから電話、あきれている。12時間かかって未だ1曲をミックスしている。0時半から2曲目のミックス。5時帰宅。
7月31日、1時音響、皆疲れが貯ま

頼む。「エスノハイ・テックな高速生成する」ヴィデオをつくりましょう。AKKOから電話でモドキがけがをした、急いで帰宅。居間でクタンと寝ている。左のほおとあごの下に傷。

7月21日、9時起床。AKKOバタバタと「出前」に出かける。2時、音響。3時半にベイスの稲葉さん、7時半にひばり合唱団、10時に近藤等則と次々録音。2時帰宅。

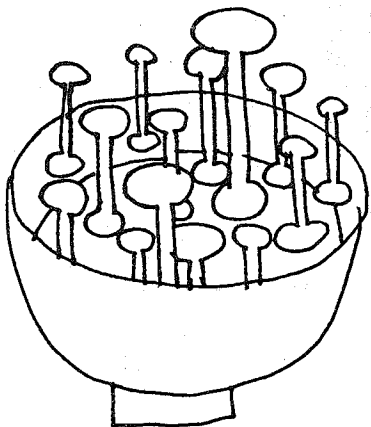
7月22日、8時AKKOからの電話で起床。風太と美雨を起こし朝食をつくる。午前中モドキとウトウトしている。12時、ラーメンをつくり三人で食べる。午後、美雨を連れて「里帰り」。祖父、祖母も交えて夕食。9時帰宅。9時半AKKOも帰宅。

7月23日、10時半、都美術館でヴィデオ撮り。7時半終了。8時、音響。秋山道男に会う。現代思想Tシャツは売れてないらしい。ポスト・モダンなんて日本の一画のできごと、思ったより

てきた。午前2時終了、3時帰宅。

——とまあ聴いてみればどこにそんなに時間をかけてるの、と言われそうなる。カンジで8月9日の午前になつと終了。足掛け1年8ヶ月、ともかく終わった。翌8月10日、ブラジルのサン・パウロまで成田から飛ぶ、25時間の旅。

坂本龍一



家族・友だち日々の糧

七月二十九日 またも恐怖の夏休みだ。家族で行こうシリーズ第一弾、としません。流れるプールはただ歩くだけ。八月二日 子ども二人は友人の教師と合宿に出かけ、新婚気分？ 昼、都立大の小沢有作さんと会って、デートだと言おうと、やさしい人なんです小沢先生って自分のことのようにうれしそうに顔してくれるの。夜、岡と映画「再会の時」を観る。なつかしい話、いずこもね懐古的。

五〜七日 家族シリーズ岩井海岸編、ずつと海と一緒に、けど、臨海学校で海は満員、仕事のうちと思ってる。学校をそれとなく朝に昼に夜にカンサツ。若い教師がやたらエバっている。エラそうにと大きい声で言ってる。ら、まや子にたしなめられた。案の定チバの中学校だった。朝の散歩をしていたら、声をかけられた。やっぱりネ

島始さんに会った。私、木島さんのずつと前からのファン。ジャズカントリ―読んだ感激、キーツの絵本とこんなすてきな父をもった希里さん、うらやましい。いろんな人がきていて社交場のように、林光さんの仕事に、私も腰をすえて仕事しなくちゃと思ってしまう。平野さん半ズボンで涼しげだ。一六日、今までのつかれか、風邪だ。高熱がつづき、その上咳がひどい。何かのたたりかバチか？ ウトウトと熱にうかされいゝんな八月を思い出した。高校を卒業して、自分で探し、就職した川崎の建設会社、そこからみた八月一五日の旗。桜本にあった会社の隣は朝鮮人居住地域だった。旗は二つの祖国の旗だった。八月の熱風にざわめくハタと私の胸のさわぎ。市電の中でみたハンガルの教科書、月払いで買ったピカピカのオーバールの最後の払いの月だった八月。シヨウウィンドーの前で買ったつもりで眺めていた服。はじ

これだけ学校が来ていると知り合いと、うのに会っちゃうのネー。朝の砂浜はラジオ体操でこれ満員。

八日、美恵、佐々木さんにさそわれ、ヒカシューのコンサート、悠治さんゲスト、すっかり若やいじやった。

一〇日 ホントは今日から二〇日まで夏休みなの。みじめにも書記局に出ている。ついてきた娘の方は美恵さんに会いマンガに熱中。

一三日 みじめにも今日も出た。律気な私はこんな日も九時半に行く、ナント三役揃いぶみ、今日、文部大臣と会見の日だ。ヒラもひたすら仕事、終ってテントのヴォイツェクをみる。ヴォイツェクと聞こえてふしぎ。

一四日 実は一日から私の日々の糧三人はいなかったのだ。娘は娘の友人のセカンドハウスへ、夫と息子は、夫の弟の山岳部の山小屋へ行っている。

今日は独身最後の日、新潮文化講演会なんか来ちゃった。上坂冬子、今

めてつけた義手の感触（出口のないゾムの手）、やっぱり二部の大学に行こうと決心したのも八月。それから、つかのま退院していた母の最後の夏、（子宮ガンだった。）

始めてプールというので泳いだのは元町のプール。その頃の元町、今みたくいかにケバケバしくなくてとってもいい感じだった。市電のどかで、三溪園の海では、小学校五年位まで泳げたのよネ、信じられないでしょ。中華街（南京街）って言った。って何でラーメンないんだらうとずっと思ってた。

横浜は生まれて育ったところだからトロリーバスや市電のあった横浜がいい。でも心のどこかに、いつか横浜で暮らしたいって思ってるのネー。父や妹たちがいるせいかもしれない。

そういえば、トロリーバスや市電って一人で乗っていると、必ず宗教のおさそいをいただいた。その手に指がはえますよというおさそいだった。ほん

江祥智氏。昼さりのウィークデー、知的で上品な奥様方と一緒に、何かとてつもなく大声なんか出したくなる気分。今江さんと休み時間少し話をして、終ってすぐ失礼した。理論社の日々野氏ともひさしぶりだった。何とか気分を変えたいハビタへ。きたなくなつた風呂オケや石けん入れなどみんなピントにかえた。夜遅く、恐怖の日々の糧たちが帰ってきた。

一五日 午前中子ども二人と東映マンガまつり、キン肉マンに興奮して、浩太郎は立ち上って大声で応援、まわりの子どもがめずらしそうに見る。終って、教育会館の教科書問題を考える市民の会に手伝いに行くことになって、自分の都合でいくら子どもをせかせてもダメ、行ったら一時、役に立てずガッカリ、仕方なくまた子どもをつれて科学技術館、北の丸公園へ。五時半に岡と日比谷でタッチ、私は一人身で敗戦コンサート。ひさしぶりに木

とうに指がはえるのなら入ったのに。そのうち知らない人ばかりでなく高校へ行くところスミイトにまで言われ、あげくの果て、だまされて連れて行かれた所に、何十人も人がきて、みんなで入れ入れと言われた。変なこと思いつい出しちゃった。さつきから高橋真梨子流れつばなし、涙もろいベギーが好きな。

この休みのために買い込んだりした本が積んだまま、でも生江有二さん、『ガダルガナルの地図』よかったです。これからのいい仕事を!!

私もいい仕事したい!!
なぜか、暑さと熱のため、今月はかなり感傷的。恐山に行つて母にでも会うかな、秋になったら……

志沢小夜子

料理がすべて

8月2日からまた旅に出た。今度はニューヨーク經由ジャマイカ。ジャマイカへは80年以來三度目の旅。

〈今月の外食〉「店名忘却」(ニューヨーク)アサリ・スパゲティ／「どさんこ」(ニューヨーク)親子丼／「デヴィッド・ハウス」(ニューヨーク)ベージュル、果物盛合せ、目玉焼／「合記飯店」(同前、チャイナタウン)カニの味噌煮、ホット・サワー・スープ／「オーシャン・レストラン」(キングストン)魚スープ、魚の甘辛煮／「店名忘却」(同前)小エビのフライ／「オセアナ・ホテル・レストラン」(同前)ベーコン十玉ねぎ十スクランブル・エッグ(ようするにぼくが作るようなオムレツ)／「店名忘却」(キングストン郊外)魚フライ／「リトル・パブ・コンプレクス」(オチョ・リオス)ス

だったが、ほとんど露天商で、でも品物別にきれいにわかれていた。パンツなどの衣類からはじまり、次第に生ま物に移行し、果物、野菜になる。果物は、さすがに種類も多い。バナナ、マングロー、パイア、オレンジ、パイナップル、ジャマイカリンゴ、それにギナップ。これは中国のレイシとブドウのアイノコみたいなもので、皮は青く硬いが、それを取り除くと、半透明でゼリー状の果肉がある。中心にかなり大きな種子があり、これはしゃぶつて吐き出す。朝ホテルの前には屋台の果物屋が出て、ここでの中心は砂糖キビとココナツ。砂糖キビはジャマイカ人の朝食で、直径6〜7センチもある太いのを一メートル分ぐらい(それで約六十円)かじり、しがむ。ココナツは椰子の実。まずあのポカリ・スエツトみたいな味の汁を吸い(といってもけつして冷たくひえていない)そのあと内側についた脂肪のようなものをコ

克蘭ブル・エッグ、パン／「ペリカイン」(モンテゴ・ベイ)貝のスパゲティ／「ジャー・ブルー」(同前)魚フライ、アズキご飯／「ホテル・アストラ」(マンデヴィル)魚フライ、トリ唐揚げ、チヨウチヨウ(キュウリに似た野菜)とトマトのサラダ、魚スープ、アイスクリーム／「ジャー・ブルー」(モンテゴ・ベイ)ブレッド・フルーツ(じゃが芋みたいな果実)牛の尻尾のスープ、カレー・ゴート(山羊のカレー)オレンジ／「店名忘却」(同前)魚スープ、青いバナナの揚げたもの、ホラ貝バターのため／「ジャー・ブルー」(同前)魚フライ、豆ご飯／「84」(レゲエ・サンスプラッシュ)会場内の店のナンバー)チキン・カレー／「ジャー・ポット」(同前)エビ、オイスターのフライ、野菜イタメ(いやに日本風だった)サラダ／「店名忘却」(同前)チキン照焼飯／「エチオピア・フィード・センター」(キングストン)チ

コナツの外側の硬い部分をヘラのようにそいで、こそげ落して食べる。コナツに穴を開け、ヘラを作ったりするのを、オッサンはナター一本をヒョイヒョイ操り、巧みにやる。砂糖キビの皮をむくのもこのナターで、「大ナターをふるう」如くバサバサとやる。

〈今月の食品の出身地〉エア・ジャマイカの機内食のうちバターはニュージラランド、塩とペパーはオンタリオ州、ミシソウガ、ドレッシングはフロリダ州、マイアミ、コーヒー・メイットはカリフォルニア州、ロサンゼルス。ラント・マクナリーの地図によれば、オンタリオ州ミシソウガはトロントに隣接する都市で人口二十五万人。なお、砂糖は本場というべきか、ジャマイカであった。そういえば、その砂糖キビから作るラム酒。日本ではマイヤーズが有名だが、現地ではなんとアツプルトン。汽車でキングストンから2時間ほど山の中に入ったところと同名の

キン照焼、青バナナフライ、豆ご飯
〈今月の自炊〉①「スパゲティ・若者のアイドル風」。「壁の穴」というスパゲティ屋さんのメニューのひとつに「若者のアイドル」というのがある。それ風にやってみた。ニンニクを刻み、バターとサラダオイルでいため、そこにソーセージ、ピーマン、しめじ、トマトをそれぞれブツ切りに入れて手早くいため、塩、コショウ、しょう油で味付けし、別のナベでゆてたスパゲティをここに加える。ナベ、マナイタなどほったらかしにしておいて、熱いうちに食べる。②「冷奴、中華風」先月シヤンペンで馳走になったカツ③「卵ガユ」残りご飯をカユにして卵を入れる。一回は、米(ご飯でなく)がもう少ししか残ってなかったので、直接カユにした。

〈今月の市場〉キングストンのダウンタウンの市場へ出かけた。といっても主として同行のカメラマンの取材のため

駅があり、そこにはラム工場もあるとのことだったが素通りしただけ。
〈今月の間違い〉どこでどうなったのか、ニューヨークから三里塚空港へ帰る時、エグゼクティブで乗ったのに、ファーストクラスに変えられた。「日での夏はオロオロ歩き」の宮沢賢治じゃないが、あまりにも過保護にされたので、オロオロしてしまった。ひと瓶七千円もするというキャビアまで出たが、ちつともオイシイと思わなかった。あれなら着色料を使っているではない橙色のカニコの方がおいしい、と思うのは貧乏性のせいだ。ジュウタンも座席もブランケットもフワフワしすぎて、静電気が強烈に起りすぎて、トイレに行きたび扉の金属で火花が出るほど放電して、辛かった。

田川律

本や人物往来記

7月22日(日) いよいよ夏休みに入っ
たなあ、という感じの日曜日。本屋
も御多分にもれず、「ニッパチ」(2月
と8月)はヒマなのです。でも今日は
朝から天気もよく、開店早々、大森さ
んから「水牛通信」を買いくると電
話があったりで、売上も期待できそう
だ。午後九時店閉いしながらシャッ
ターをおろしていると、向こうから颯爽
と二台の自転車がこちらに向ってくる。
熊谷さん夫妻だ。ご主人はインダスト
リアル・デザイナーだけど、割と古風
で慎重派だ。奥さんはピアノ教師で、
最近シユタイナーのオイリュトミーに
凝っている。それをダンナは一抹の胡
散臭さを持って眺めており、その冷や
やかな視線をうらめしく思う妻が、シ
ユタイナーの復権(亭主をつれて)に
訪れた訳らしいのだ。ダンナ言わく「新

興宗教に近いものじゃないの」と、い
まだスッキリしない目つきでこちらを
見やりながら、「シユタイナー入門」
と「私とシユタイナー教育」を買って
いきました。(その後どうなったで
しょうか)

7月24日(火) 定休日なので、かねてか
ら観たいと思っていた「ジョニーは戦
場へ行った」を見に行く。高田馬場東
映パラスでのリバイバルロードショー。
ようやく見ることができた。(本の流
通も新刊偏重の度が過ぎて、全く惨た
んたる有様だけど、映画のそれも、ロ
ードショー中心、名画座形式の衰退な
どで相当にひどいと思われる)忘れか
けていた「ベトナム戦争」ということ
ばと、そこから抽きださうする(そして)
当然いまでも引き摺っている重たい事実
の一片を、見る者につきつけてくる。
ごく最近も、たしかベトナムとタイの
国境付近での奇形児出生率が高まって
いると新聞が何かで読んだばかりだ。

書くのだ。そうして食事を共にしなが
ら、益々熱を入れていくのだ。因みに
今日の主なテーマは「フアシズムの日
本語」「アジアからの視点」「80年代ヤ
ングカルチャーの可能性」「昭和を動
かした人々、動かされた人々」「報道」
「アジアからの旅人」「手づくり文化
と働らく女性」等々。時計を見ると9
時半を回っていて、おひらきになる。
と同時にがっくりと疲れを感じた。相
当、緊張した時間を過ごしたのだろう。
私は一言もしやべらずに、聞く一方で
通してしまった。又、参加できる機会
を楽しみにしています。

7月27日(金) 二ヶ月近く支払いを待た
された画廊から、やっと小切手が到着。
(督促状の末)換金するのに三日もか
かる。すっかり画廊嫌いになりそう。
7月30日(月) 明日が定休日なので、店
の家賃を今日払う。昨日は自宅の。金
欠病に効く東洋医学はないものか。
8月1日(水) 鈴木書店(人文社会科学

書専門取次)に仕入れに行くと、そこ
の二人が「再会の時」がおもしろいよ、
特に30代には感慨深いよ等と話をして
いた。8月は新刊も少ないし。暑さの
せいで客足が遠のく。

8月9日(水) 公民館へ長男と「風の谷
のナウシカ」を見に行く予定していたの
だけれど、おばの家が居心地がいらい
しく、帰って来ないので、一人で見に
いく。圧倒的におもしろかった。アニ
メだということから過度に期待
していなかった(偏見!)ことも手伝
って、手放して感動してしまった。泣
けた。おもしろかった。しっかりと構成
されたドラマ(オリジナル)になって
いて、ディテールも説明的でなく、ご
く自然なかたちで説得力をもって追っ
てきた。現代文明批判でありながら、
人間をおとしめない。だから後味もま
ことにすがすがしい。これ以上かくと
却って、ナウシカを汚すみたいだから
書くのはやめて、とにかく見てみて下

映画館をあとに、東西線で思想の科学
社のある飯田橋へ。増井さんのお誘い
で、「思想の科学」のひらかれた編集
会議へおじゃまさせていただく。入る
と、こじんまりとした編集室の奥の窓
際に、10数人が座れる椅子とテーブル
が、骨太の本がビッシリと詰まった本
棚を背にして、ある。密度の高い空間
(狭い空間?)なので、すぐにでもポ
ルテージがあたりそうだ。緊張気味で
待っていると(一番乗りしてしまった)
本の背や表紙や記事でしか見たことの
ない名前の、そのご本人が続々とあら
われた。鶴見俊輔さん、北沢恒彦さん、
室謙二さん……。何となく冗談を言っ
たり、笑ったりしているうちに、いつ
のまにか課題に入っていた。半年以上
先の雑誌の大テーマと、そのテーマに
ふさわしい書き手と、書いてもらう内
容を細かく検討していく。途中、隣の
人から「メニュー」が回ってきた。
自分の食べたいものをもう一枚の紙に

さい。
8月13日(月) 今日から15日まで夏休み。
息子といとこを連れて、インド大魔術
団を見に行くが、開演20分前につい
ても、満席で、指定も立ち見もなく、や
むなく映画でもつれていくかと情報誌
を見ても、これといったのがなく、14
日からなら、「風の谷のナウシカ」を
上映する館もあんのになあ、とくやし
い思いをする。子どもをなだめて、
今日はホッケーゲームなどして帰るこ
とにする。明日又、出直して「ナウシ
カ」を見ようと約束する。

笠原功三

たのしみがない

七月後半から日記のかきこみは毎日へっていき、八月前半には完全にとまった。かきかたや、ノートをかえてみようとともおもったが、かえるべきものは、まず生活だ。ところが、生活はかえようとしてむりできるものではない。さそうだ。

八月、しごとはほとんどなかった。それでも、あそびにいくひまはなかった。はたらくすぎても廃人になるし、しごとがなければ、ゆめもみない。生活がこわれているとおもいながら、手のだしようもなく、じっとしているうちに夏もすぎっていく。

笠井潔が送ってくれた本二冊、「テロルの現象学」と「機械じかけの神」を何日もかかってよんで、むかしとリつかれていたゆめが、ページのなかからよみがえるのを見た。「オルフィカ」

アルトは死の年一七九一年に、時計じかけの自動オルガンの曲を3曲かいた。やわらかい照明のなかにかぶロウ人形のうしろから、この世のものともおもわれぬうつくしい音楽がひびいてくる。3曲はそれぞれ、死んだ將軍と死んだ皇帝、それにねむる女の像にしかけられていた。

水牛楽団のコンサートを10月末に計画している。カラワン楽団の2人、スラチャイとモンコンが日本にくるので、ともだちをあつめての歓迎コンサートだが、水牛楽団の休業明けのかたちは予想がつかない。

タイでは、七月に都市にもどった元活動家たちがコミュニティだというこどでつかまったのにつづいて、八月にはスラク・シワラクサが王室不敬罪で逮捕され、軍事裁判にかけられるらしい。右翼が国会に毎日デモをしているし、クーデターのうわさがある。とりあえず何人かで公正な裁判をもとめる請願

や「メアズデル」をかいていた頃、闇をくぐりぬけて向う側の光のなかに立つことができるような気がしていた。音楽はそのための道具だった。

それはおもしろいすぎなかった。解放されることは不可能だ。じたばたするだけ日常のしがらみのなかにしずんでいく。退屈して、ひからびて、いずれ死んでしまうのだ。

ここからぬけだす方法はなく、このままずっとすわりつけていなければならぬ。音楽のあたえる解放感にはほんものではないことが、じつはすくいなのだと、やっとおもいはじめた。闇はさがさなくとも、ここにある。光をもとめてもむだだ。手だてがまったくうしなわれたとき、むこうからまっすぐやってくるものがあるはずだ。だが、ふりかえってはいけない。

シヨスタコーヴィチの楽譜を見つけた。「ヴィオラ・ソナタ」(月光ソナタ)の引用のある、「弦楽四重奏曲第15

電報をタイ政府に送り、タイの新聞社にコピーをまわす。

ここまでは個人としてできるが、そのさきは効率の問題になって、あまりうごけなくなる。いちばん効果的なのは、日本政府をうごかすことにきまっているが、だれもそんな力をもたない。では、マスコミか。

そうなつてくると、能力、地位、とくに権力をもっている方が有利になるが、こんなことでもいいのだろうか。

「ロスト・ロスト・ロスト」のなかで、雪のニューヨークで街頭アピールをする平和運動グループの女たちを写しながら、「かれらはそこにいた、それをカメラで記録する、なぜそうするのかわからない」というジョン・メカスが正しいとおもう。メカスは難民だった。それ以来ずっと、「通りすがりの人」でいることができるのだ。

NHKテレビの「アジアの旅芸人」シリーズに音楽をつけるために、タイ

番「シヤコンヌ」の引用のある、「ミケランジェロのソネット」。最少限の音で、それも切りつめた表現などではなく、ほとんど放心状態ですすむ。意味をこえ、表現や表現者にわずらわされない空間に音を解放することができるとは、ジョン・ケージのように何でもできる自由からではなく、抑圧され、反抗の道もふさがれた状態においてこまれたときだ、とてもいのか。そのような音楽をつくるのは思想ではなくて、技術であり、その作者は人間の感情をすてて一個の音楽機械に変身する。

この技術からつくりだされた音楽は人びとをひきずりこんで、にせの解放感をあたえることができるが、カフカの処刑機械のように、その作者だけは例外として、くるしみながら死んでいくのだ。

11月13日、中野文化センターで三宅榛名とのコンサートのタイトルを「音楽機械モーツアルト」とする。モーツ

のモーツアルトのフィルムを見た。かれらはもう旅に生きてはいない。音楽学校でおしえたり、政府の農業政策を歌で宣伝して生計を立てている。それでもタイの風景はなつかしかった。ダイレクターの馬場さんと、「タイにまたいきたくなるのはなぜか、まったくわからない」ということに意見が一致して、お酒をのんだ。

高橋悠治

名僧・日記

七月三十日 東京出張（葬式をやりに行く）の帰り、大混雑の「あずさ」で奇跡的に空いていたグリーン車なるものに何年振りかて乗る。お布施がまあまあ入ったためか、グリーン車に乗ったからか、何やらリッチな気分だ。コロモを着てまるで坊さんだったので、隣りに座った若い女の子の居心地が悪そうだった。しまいに車掌さんに向って「別の席空いてませんか？」と同時席するのがいかにもイヤそうに訴え、とうとう席をかわってしまった。

ひどくガツカリし、私はヒョットしたら名僧ではなく単なるクソ坊主で、そのクソがやけに臭かったから逃げたのかな？と自虐的に考え、リッチな気分がいつべんにフツ飛んだ。

七月下旬～八月上旬 毎年我が寺の人口が急にふくれあがる時期で、お盆

火の仕末に気をつけてネ」と優しく言ってしまう、言ったあとで軟弱さにあきれた。……といった調子で多くの人間がうごめき、夜ともなれば生ビールパーティーが毎夜くりひろげられる快よい日々が続く。

八月八日 一年中で最大の行事の施餓鬼会。二百人を越えるその日限りの善男善女が集まり盛大な先祖供養をする。二年程前から長男（七才）と二男（五才）がかわいい沙弥ごろもを着て法要に参加している。この二人が入ってくるのと「ワーツ」と歓声が沸き、中には拍手したり、目頭を押さえる檀家の老人もいる。何ということだ。ヤツラ二人が出るまでは私が一番の人気者だったのに。坊さんも人気商売となってきたこの頃、この落ち目を何とか回復しなければ。

八月十二日～十五日、この四日間はずさまじいの一語に尽きる。朝早くから夜遅くまで一日にナ、ナント百軒以

用の手伝いの若い衆が家族の一員として盛大に入り込む。

その一部のヤツラを紹介しよう。「墓そうじ主任I君」 本郷三丁目の有名な喫茶店の重役。十年以上墓そうじだけのために東京から出かけて来る。誰の墓が裏山のどの辺りにあるかは私より詳しい。八月一日にやって来て十日に帰る。しかも東京都北区というナンバーを付けた何と、五十ccのバイクで十時間もかけてやってくる、つまり変り者である。そして日中の汗と夜のビールの代謝をことのほか好むいいヤツだ。

〔居候で大メシ食いのE君〕仕事量に比べてドンブリ三杯は少々アツカマシイが、我が寺に同居中のバカ犬（誰にでも、何回来た人にも吠えつく……まあ職務励行といえればそれまでだが）までもが尊敬してしまうほどの真面目人間で墓そうじの見習い中。

〔高校生M君〕まわりが情緒障害だと

上の檀家を回り、お盆のお参りをする。一時間で平均十軒回らねばならないから移動の時間を入れて一軒あたり六分程度処理しなければならぬ。あいさつが「コンチワ」と「サヨナラ」で二百数十回、お布施をいただいて「アリガトゴザイマス」が百数十回、お線香をつけ、お経をよみ、回向をする回数が各各百回以上、それを四日間同じパターンで続ける。しまいにこんがらがってお経がスツ飛んでしまひ、ビートルズの「ヒア・カムズザサン」あたりが思わず知らず口をついて出てしまう。こゝうなったらお経じゃなくて余興だ。それでお布施がもらえれば、まるで芸能人ではないか。

八月十六日、本堂前の中国原始蓮の大輪が咲く。丁度送り盆で沢山の人の神秘的な姿と色を見てもらった。しかし、「造花にちがいない」と葉っぱをめぐつてのぞき込む疑い深いオバサンがいるのには驚いた。これをもって本

いつているし、某有名国営放送のプロデューサーをしている親もその気になっていて、お寺にあずければピタリと治してくれるだろうと安易に考えられ送り込まれた、まったくフツの高校生である。感性豊かで、素直で、心配りも随所に見られる彼だから、そこらへんが欠けたいわゆる情緒のない連中の目には情緒障害児と映るのだろう。

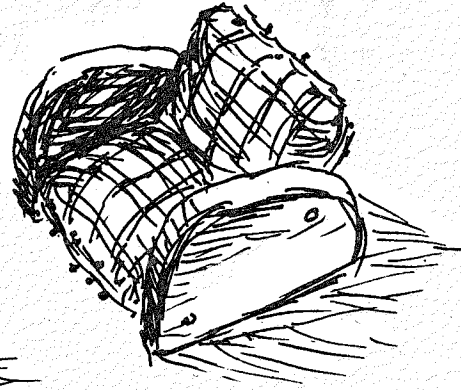
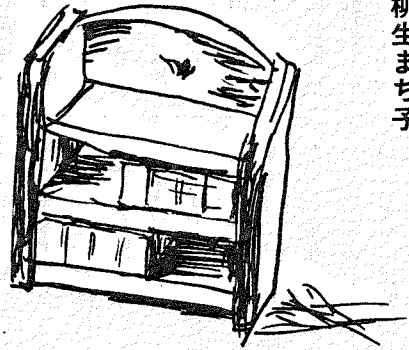
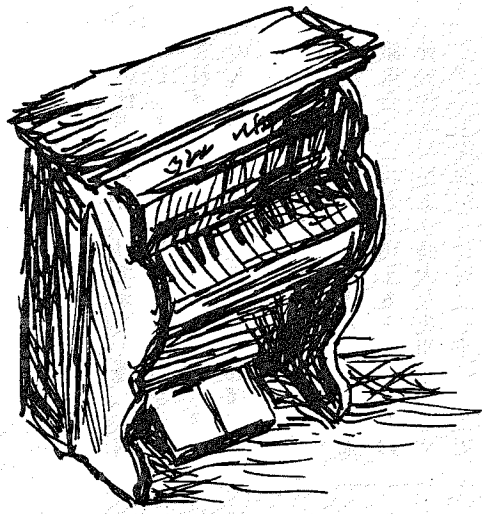
〔突如訪れた千葉大学の銀輪部隊〕「私たち千葉大学のサイクリング同好会でエース。今晚本堂へ泊めていただきたいエース。」ときた。「でエース」と言えば何でもまかり通ると思つたら大間違いだ！ それにこは浅間温泉と違って泊り客を泊める（アタリマエダ）旅館が五十軒もあるんだ！ しかも何だ！ 大学生のくせに男三人女二人なぞという不純な数で来おつて！ そんなうらやましいこと許せるはずがないこはお寺だ！ と、名僧らしくキバろうとしたが「自由にお泊りなさい。

年のお盆は終了である。来年まで稼がないと思うと残念だ。

八月十七日、久し振りに民間人に戻り、松本ふれあい広場の世話人会。教育と福祉を考えるシンポを組んでみる。シンポジストに、西山正啓、山本哲士、柳沢重也、播間靖夫の四氏。その筋の達人ばかりだから面白くなりそうだ。

八月十八日 お盆の疲れがドツと出た。暑さにも参ってしまったのでリポビタンをのんでオロナインをつけて早く寝た。

高橋卓志



妹の子供たちと一緒に九州へ帰った。きょう子
ちゃんは、今年小学校へ入って、初めての夏休み。
「きょう子、このごろ、ひまー」学校がないから
暇ってことらしいです。

「暇ってなあに？ 教えて」

「えー、うそだあ、大人なのに知らないの？」

「子供のくせに暇だって！ 子供の暇ってどんな
か知らないもん」

「大人の暇と違うの？ えーとね、することなく
てぶらぶらしてるの。じゃあ、大人の暇ってどん
なの？」

「うーと、することなくてぶらぶらしてるの」

「じゃ、おんなじじゃない」

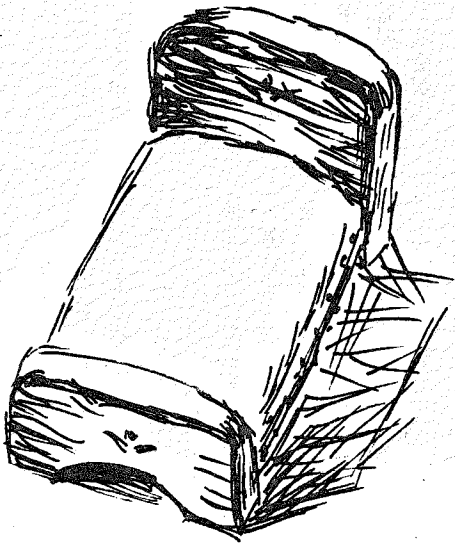
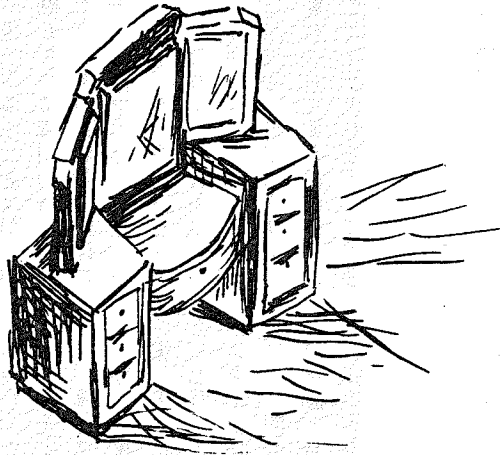
「そうかー、違うと思うけどねえ」

せっかくなきゃって来た九州なのに、台風になって
どこにも行けず、それでも一日中家の中で機嫌よ
く遊んでいたけど、とうとう夕方方になって、

「ああ、退屈だなあ」というから、

「子供の退屈ってどういうの？」と、また聞いて
やったら、同じ手ではからかえない。

「大人の退屈ってどういうの？」ニタニタと笑
ったきょう子ちゃんにいい返されました。



行ったり来たり

七月二十一日 映画『みちことオーサ』の上映会に招ばれ山口県の下関に向かう。下関は僕が高校時代までを過ごしたふる里だ。いまでもその両親は大阪に住んでいるが、友人は何人かいる。しかし、ここ十年近く音信不通の状態が続いていたから、皆どうしているかなあなどと思い始めたら無性に嬉しくなってしまった。下関に着くと早速幼なじみからここに居るから来ないかというメッセージが届いていて夜遅く指定された飲屋に押しかける。暗い店内の奥でベースを弾いていた彼が眼の前に現われた時、一瞬とまどってしまった。スリムだった昔の彼を想像してここにやって来たのに、腹の回りが少々豊かな人物を眼の辺りにして、あー十年間の空白ってこういう事なのか?と僕は思わず我身の腹回りに手をあてて

いた。ニシヤマ、お前ドカタのカントクやってたと思ったり、エイガのカントクやってるの?とは彼の第一声。そう、どっちでもいいけど、なぜかいまはそうなるのよね……。

現在では年商十億の宝石商を営む実業家として下関では有名な彼、よくいじめてた幼ない頃がまるで夢のよう。

七月二十二日 下関勤労福祉センターホールで上映会。下関で上映会が出るなどとは夢にも思っていなかった。昨夏、防府市上映に下関郵便局勤務で雇用平等法や優生保護法改悪反対の運動を孤軍奮闘している森川万智子さんが参加してくれ、その事がきっかけになって一年後の今日やつと実現したのだった。故郷とは言え、森川さんと実行委の仲間の人たちのつき合いは僕にとつて下関との新たな出会いである。上映会場には高校時代の友人や幼なじみが数人、駆けつけてくれそのせいか上映前の話では上がり上がりになってしま

た。この日観に来た人の数は二百三十人。実行委の皆さんほんとうにお疲れさまでした。ありがとうございました。

七月二十三日 昼間、森川さんの家で仲間の人たちとずっと話し込んでいた。暑さまっ盛り。

夜、高校時代の友人宅に泊ってもら

う。

七月二十四日 昼前の新幹線で大阪へ。大阪はクソ暑い。

七月二十六日、オヤジを見舞う。先日来た時は黄ダン症状で身体中がまっ黄色だったが、今日はだいぶ持ち直していて元気そうだった。病名は胆道ガン。蓮見ワクチンを使ってみようかなと思う。夜、中野の野外コンサートの実行委員に参加。

七月三十一日 東京ボランテニアセンターで映画の打ち合わせ。子供の遊び・空想づくり、有機野菜の生産、産直活動、自立障害者の介護・介助、バングラデシユの農村に関わる活動、世

田谷雑居まつりを主催する活動などを三十分の映画にしてまとめてみたいと思っている。それにしても久しぶりの仕事。時々、俺は何してメシを食っているんだろうと思ったりする。他人からみるときつとカスミを食ってという風に見えるんだろうね。内緒。

夜、映画『みちことオーサ』のみたか・武蔵野上映実行委に参加。三多摩の一角に住んでいると吉祥寺は拠点、そこで初めて上映が実現するのだからやはり嬉しい。さて、何人はいるかな?

八月十三日 中野野外コンサートの呼びかけ文を作成。テーマは「いま創り出そう、平和と共育を、われわれの手で」。今年はコンサート、教育シンポジウム、そして映画づくりを目指すという構想。

八月十六日 午後、中野桃園幼稚園で子供たちの遊具づくりをしている、新日文の会員で本職は大工の平間廣四郎さんの仕事を写真に撮る。遊具と言

っても杉やひのきの丸太を約四百本も使い橋やジャングルジム風の構造物をつくるのだからスケールはでかい。子供たちが夏休みでないのはちよっぴり淋しいが、九月に入って初登園した時の子供たちの表情はさぞかし喜びに満ち溢れているだろうな。

ちなみに、平間さんの仕事は山に行つて木を選定、切り伐るところから始まるのです。

八月十七日 六月に依頼のあった八ミリフィルム——再生不良性貧血に冒され六才半で亡くなった女の子の記録——編集にようやくとりかかる。

撮影技術の面では多少しんどいかなあと思えるフィルムだが、六年半にわたり記録された中味には人の心を衝つて止まない何かがある。成長時期の折々の単なるスケッチではなく、今日は何年何月何日 めぐみ何才と何ヶ月、というクレジットが入っていて、親が子を想う心の動きがそのまま画と音に

まるごと記録されているのです。死の十日前に撮影された病床にあるめぐみちゃん氣息絶え絶えになって詩う、大きくなら何になる……は、命の尊さというものを何にも増して教えてくれます。九月上旬にビデオで完成します。題名は「聞こえるよ めぐみちゃんの声が」(二十五分)一度観て下さい。撮影は父親の川崎有成さん。

西山正啓

前略、ブタ草です

今、私はプー太郎です。プー太郎の私はもうひと月ばかり、ひっきりなしに遊び呆けています。とても元気で、みなさんおかわりありませんか？

毎年、世間が「夏だ！ 行楽だ！ ファイバーだ！」と大騒ぎする割に、私の夏は何てことなく、その分秋のさみしさっていうのも、ただジワッとやってくるのが常なのですが、今年はずちと違い、秋になったら早速オイオイ泣き出してしまおう予感がします。

夏の始めに、高校時代ずーっと好きだった人に会いました。なにしろカッコイイので、今だに会うとドキドキするのです。微笑むたびに左ほほに刻まれる、スケベの象徴・片エクボも変わっていません。今は松田聖子ちゃんをこよなく愛している、と言っていました。相変わらず、私の心が決して届かぬ人でした。その夜、酔っ払った私は、

られて仕方ないので、パットパットゴルフをやりました。正直言って私は下手です。けれども、みんなが、苦手とするコースになると、突然ボコッと入れたりするので拍手喝采でした。「私は、一攫千金タイプの人を送るのかもね、ふふふ。」と心密かに思ったものです。

それにしても松山に来てまで、テニスやパットパットゴルフやカラオケに興じるばかりで、本当に芸なしの若者たちです。

思いの内に残されたのは、道後の坊ちゃん団子の味と、卵子焼きの食あたりによる一晩の苦しみと、石手寺の水子地藏たちと、二日連続してみた大きな大きな虹でした。この虹は、「東京では絶対に見られないぞー。」と言わんばかりに、一度に視野には入りきらないくらいでっかく広がっていたし、その虹の端から端まで、何も邪魔が入らずまるごと見える程の大きな松山の空

これまたハンサムの男の子に電話をして、「これこれこうだったのよー。」などと報告して、パッシュョン・ダモールという映画の話なんかしたおかげで、そのあと何と落ちて着いて眠れました。

デイズニールランドに行きました。二回目です。でも、今回のデイズニールランドは決して夢の国ではなく、スペースマウンテンもジャングルクルーズも、がきんちよの群に振り回されるお父さんたちで満杯でした。ミッキーマウスの顔のついた風船を三つ、飛ばぬようしっかりとにぎったお父さんの右腕には、小学生の子供たちが、入れかわり立ちかわりぶらさがったりしがみついたり……左腕には、ビニールにくるまった大きなぬいぐるみがかかえられて……それでも汗だくの短パン姿のお父さんは、怒らずに微笑んでいらつしやいました。そういうお父さんに限って、帰りのバスでもはずれくじを引いています。結局、おうちに着くまで立ちっ

がまたすごかったのです。

松山にて久しぶりに再会した友は、相変わらずで、ずんがりした身体に、小犬のようなやさしい目を細めて、「35才になったら松山に帰ってきて子供でもつくるんだ。」と勝手なことを言っていました。ふと、デイズニールランドのお父さんたちの姿が目につかび、私はふふつと微笑みながら、「お父さん、がんばってね。」とつぶやいていました。まだまだ大きな子供なのかもしれない私や友だが、お父さんお母さんになって大奮闘する夏もそう遠くないのかと思うと、あのでっかい虹に飲み込まれてばかりはいられません。

帰りの新幹線が東京の街に入ると、突然、松山で過ごした日々がまるで夢のように思われました。竜宮城から帰ったプー太郎は、丸二日間牛のように眠り続けましたとき。

まだ東京は暑いですが、不思議なこの夏は、私の親友たちも、遠く離れてし

放し、ぶらさがればなしなのでしよう。

翌日行った逗子の海でも、それから広島行きの新幹線でも、お父さんたちは大奮闘でした。私などは思わず、自分が今でもお父さんにぶらさがれる大きな子供であることも忘れて、「お父さん、がんばって！」と喋るかわいなお喋り人形があったらプレゼントするのにな、などと考えていました。

四泊五日の松山旅行もこの夏のダイベントでした。

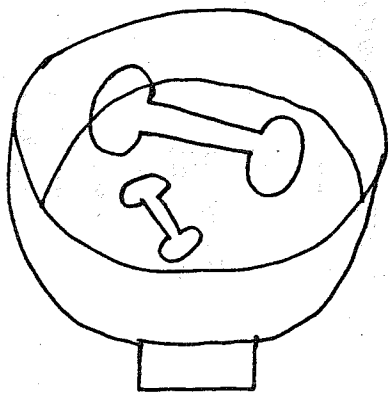
松山に着いて一日くらいたつと、すっかりその気になって松山弁のまねっこをしはじめたのは私です。「どしたんぞ？」「何しよん」などと調子にのってやっているうちに、とんでもない言葉が私の口について出ると、本場仕込みの諸兄に、「それ、どこの言葉ぞ!!」と茶化されたりしました。私はえへへ、と照れ笑い。

海にドライブに行ったところ雨に降

まった恋人たちに会いに鳥取や高松に出かけて行きました。思い出深い夏です。今度、かき氷の食べ収めてもしいです。では、また。お元気で。

—五十九年夏—

竹内晶子



ぼちぼちいこか

8月5日、炎天の広島駅に着いた。約束の時間に大巾に遅れてしまったのでサンポーニヤの平井さんの姿はほはやない。仕方がないのでひとりて原水禁大会に行こうと思いつき、原水禁大会案内所の立て看板の所に行ってみたが誰もいない。駅の総合案内所で聞いても「おじさんが今日の旅館はすべて満室です」と書いた紙の前に「さあそんな会合どこでやつののかなあ、ここではわからんから市役所にも聞いてみたら」と実にすげない。市役所で聞けと言われても今日は日曜日じゃないかと少しムカツときた。駅に案内のポスターを一枚はっておいてくれたらすむことじゃないか。どうやら組織されていない一般人には参加しにくい大会のようだ。結局宿もないので、平和公園でハトに豆をやって、最終の新幹線で帰

8月16日、22日まで4歳の娘麻耶を連れてフィリピンに行ってきた。マニラ、シゴゴン、ボホール、セブと島々を中国の客船で回るツアー旅行だ。今まで水牛に載ったフィリピンのいろいろを読んだり、「人を食うバナナ」のスライドを見たり、フィリンから来たバナナプランテーションの労働者の話を聞いたりしたので、一度行ってみたかったのだ。マニラに飛行機で着いた日は台風の出迎えを受け、マニラズサンセットはもちろんだめ。道路は水びたして車はまるで川の中を走っているよう。マニラ空港は日本人でごった返していた。よくもまあこんなに日本人ばかりがいるものだ、自分が日本人なのも忘れてあきれてしまう。8月21日はアキノ氏が暗殺されて一年になるので、反マルコスを掲げたデモが毎日、サント・トーマス大学で昼休みにあるという。行ってみたかったが市内観光バスはいつもは通る大学わき

ろうと思つて駅で電車を待っていると平井さんが、私のしておいた家人への伝言を聞いてかけつけてくれた。助かった。

8月6日午前8時、慰霊祭に参加。平和公園まで一時間半歩いてやってきたという78歳のおばあさんと話をした。どこから来たかと尋ねられ、大阪だと答えると「それは本当に御苦労様ですね。私の姪も大阪にいますが、自分の母親が被爆して死んだのに一度も慰霊祭には来ません」と寂しそうな顔をした。私はその姪さんと比べられたので、とてもいごちの悪い思いをした。姪さんにもそれなりの深い思いがあるような気がするからだ。「これも何かの御縁ですね。どうぞいつまでもお元気で」と言われ、私もあわてて「おばあちゃんこそお元気で」と挨拶し、小さな背中を見送った。

8月9日詩人で、重度の身障者で、印刷会社の社長で（といっても従業員の道を危険だとはずし、かわりにアメリカ人墓地に連れていってくれた。るいと並べられた白いペンキ塗りの十字架の列。まるでマスゲームを見ているよう。出るのはため息ばかりなり。学校に行けず、道路で信号待ちの運転手やバスの客にタバコやキャンデーを売っている子供たち。町にあふれるコカ・コーラと日本車。ホテルのロビーで客を待つ一目でそれとわかる若い女の子たち。彼女らを連れている中年の女性の手にはシャープの電卓。その彼女たちと部屋に消えてゆく日本の男たち。カルチャーショックならぬ、第3世界ショックで私の心はささくれだっていた。しかしマニラを離れて悠長に船旅をし、小さな島々に行くと、美しい海と涼風と、くつたくなのない島の人々の笑顔に心はなごんでいくのだった。

8月21日再びマニラに戻るとその日はアキノ氏の一周忌集会が開かれていておびただしい数の人々が集まってい

は一人だが）冒険家の岸本康弘さんから電話。「今度の日曜にどっかへ泳ぎに行かへんか」とのこと。残念だけどその日はダメで断わる。彼もとても残念そう。つい先日、彼をモデルにした子供向けドキュメンタリー「岸本おじさんの冒険」が出版された。思わずホロリとし、最後にはとても勇気づけられる本だ。私も娘が小学校に入学するようになれば、是非プレゼントしようと思う。

8月13日ロス五輪閉幕。職場ではみんな仕事そっちのけで閉会式の派手なショーの衛星中継に見入っていた。今回は日本は予想された程メダルの数はなかったらしいが、表彰台にたなびく日の丸を見るたび、広島島の詩人栗原貞子さんの「旗」という詩を思い出してしまう。「日の丸の赤は人民の血・白地の白は人民の骨……君が代に伴奏され、いつまでもいつまでもひるがえる血と骨の旗……」。

た。みんな黄色のTシャツを着て、顔を合わせるとVサインをおくってくる。タクシーは同色のリボンをなびかせて走っていた。信号では今日ばかりは子供達が黄色のリボンを2ペソ(約28円)もピストルを持たずにやったそう。私の想像した程の緊迫感はなかった。それにしても疲れた。帰って来てから原因不明のひどい下痢が、私も、麻耶も止まらない。まさか赤痢じゃないとは思うけど……

8月24日恒例の全金港合同との秋まつり実行委員会に出席。今年は劇団みなとと芝居の台本づくりから共同でやることになっているので来月は忙しくなりそうだ。みんなて歌って踊れる、みなと音頭”でも作ってにぎやかにやろうかな。

金野広美

ぼくが作った本

夏休みも、うんと煮つまった。朝五時に起きて外へ出る、遠くの方に老人の散歩するのが見えるくらいで、町内はまだ、ひんやりと静まっている。浅草橋の駅をおりと少年の脚はいやがうえにも速くなる。びくんびくん、ひと呼吸おいて、ぴつと合せる、やつてる内におぼえるよと船頭が、こつちのはやる心を見すかすように、にやりと笑った。東京湾のハゼはまだ小さい。小は五センチ位から、大は十五センチ位まで五十三匹の成果、背中から三枚におろして天婦羅にして食べた。ほんのり甘味があつて、実にうまかつた。さて●ビートルズって何んだ？ 五十三人のマイビートルズ、講談社文庫。昔々に出版されたものに新しい数人のエッセイを付け加えまとめたもの、文庫だとどうもナメてかかるのがよくない、

るのが楽しみだね、内容はまだ見てないんで何んともわからないけど、いっこの茶碗のできるまでのさまざまなこと、わくわくするね。同時に、修学院離宮、文・田中日佐夫写真・大橋治三。●性教育学講座 人間の性とは何か、性教育学研究所、発売小学館。なんともすごいところから仕事を依頼されたものだ。原題はSEXUAL DECISIONS性における意志決定ってなもんか。原書をばらばら見てみると目をみはるような写真や図版が入っている。このまま出版するんですか、一応医学書ということだね、一般書店にも置いて若い人たちにも見てもらいたいと思ってるんだが、発売元の社長が神経使っちゃってこんなタイトルになりました。うーむ。●話は映画ではじまった、PART 1 男編、高平哲郎、和田誠絵、晶文社。いい男たちへの熱烈インタヴュー集も和田さんのイラストが遅れて出版もちょっとずれた。和田さんはいま阿佐田

どうもうまくいかない、やや斜めから見てみる、あわててトンポ（仕上りの目じるし）をつけかえて出来上り。

●被抑圧者の演劇、アウグスト・ポアル、里見実、佐伯隆幸、三橋修訳、晶文社。メモを見ると「吹き出しをやれば本になる」なんて書いてある。「ドナルドダックを読む」のときに使った手をここでも使う。マンガの吹き出しはどうみても言葉なんだから、メッセーじはそれなりにあらわになるわけだ、でもね、滝田ゆうのマンガの吹き出しの中には鼻緒の切れた下駄の絵が入っていたりするし、スタインベルグのグチャグチャの吹き出しなんてのもあるわけだ、どうだろうかね。

●紳士同盟ふたたび、小林信彦、新潮社。週刊サンケイでコンゲームをふたたび連載したわけだ。例によって河村要助のイラストレーションは快調。実に楽な作業となる。コンゲームだからね。●きつねのうみほおずき、しみずみち

哲也の「麻雀放浪記」の映画監督をやっている完成もまちがとか、今では元イラストレーターと自称してるとか。

●晴ときどき嵐、向井敏、文藝春秋。向井敏さんは電通マンかなんからしいたいへんな読書家だそうで、この本の仮題は「読書航海記」だった。これで内容もわかる。まあいちばん取り組みやすい本なだけけど、これを持ちこんだ編集者がわかった、萬玉邦夫さん、彼は知る人ぞ知る装丁家、活字使いの達人なんだ、ご自身は編集者でもあるわけだから装丁家としてはペンネームを使ったり、装丁者の名前を入れない場合もある。でもちよいといいなと思っっていた本は問いただしてみると萬玉さんの作品であるわけだ、こりややりにくかった。

●活劇の行方、山根貞男、草思社。見すえねばならないのはアクション映画ではなく、映画のアクションである。なるほど、これはカバーに入れたタタ

を作、梅田俊作絵、金の星社。講談社の出版文化賞、ブックデザイン賞を受賞したので仕事がふえたでしょう、とよく人に聞かれるけど、そんなこともないなあと思っていたら、この本がそうだ、タイトル文字を描いてくださいとお腹の大きな女性編集者がやってきた。この本が出るころは産休に入るのでお届けできないのが残念ですわ、なんて汗をいっぱいかきながらほっほっほと笑った。きれいだね。じつは梅田俊作さんも受賞者。

●はな子さん、いつてらっしやい、如月小春 TOKIOLGY LIVE、犀の本、晶文社。朝日ジャーナルによると、如月小春さんは若者の神々のひとりだそうだ、だからそのまたひとりの日比野克彦氏のイラストレーションを拝借して、なんとも神々しいカバーが出来上るのではないでしょう。●唐九郎のやきもの教室、加藤唐九郎、トンポの本、新潮社。この本は出来上

キ。昭和初年に出版されたような本にしてくださいというのが著者の希望です。アナクロにならなけりやいけれど。

●私説東京繁昌記、小林信彦、荒木経惟写真、中央公論社。今はなくなつた雑誌「海」に連載されたもの、雑誌では大きくできなかった写真を大きくあつかってほしいと注文されたけど、頁数のぐあいで、そんなに大きくできなかった。ほとんどがスナップ写真なのにわりと面白い、東京にはまだまだ古い所が残っているのですねと感心していたら、新聞広告に東・京・再・発・見なんて出ていた、のせられたかな。●レバノン危機のモザイク国家、荒田茂夫、朝日新聞社。レバノンというのは美しい国という意味なんだってね、大きさは岐阜県ぐらいなんだそう。●メディアが何をしたか？ 橘川幸夫、ロッキングオン。●ヘンリー・ジェイ、エイムス作品集⑧などなど。

平野甲賀

わるいくせ

七月になると毎年かならずおもしろい歌の一節。「七月は、すっかりのどがかわいて、麦の穂のようにねむいよ」

八月 東京拘置所にいる秋山芳光さんからの葉書。

「残暑お見舞い申し上げます。

そのご八巻さんにはご健勝のことと存じます。

いつも「水牛通信」を送って頂きながら、何ひとつ協力もご挨拶も出来ず、心苦しく思っております。

私は最後の上告裁判での書類作成と各方面での照会と証拠集めに追われ、寸暇に「水牛通信」を嬉しく拝読させてもらっています。先日も桜庭さんの報告が載っておりましたので私も何かと思いましたが、文章は苦手ですの、何句か俳句を書かせて頂きますが、もし句でよければ、これからも出来るか

ざり書くようになります。これからは残暑が続くと思いますので、皆様共々ご留意下さいませ。ありがのうございませした。失礼しました。

○西郷の犬吠えんとす夏雲へ

○独房に途切れ途切れの祭笛

○昼寝せる妻の喜怒哀の坐膀胱

○出してくれ！蟻の鎖に乞う狂囚

○透きとほる朝を涼しく胡瓜もむ

○裏門に空蟬しかと縫りつく

合筆

秋山さんは、桜庭章司さんを通して水牛を知り、葉書を送ったのがはじめて、それ以来水牛をお送りしている。最新の「桜庭さん救援会会報」によれば、桜庭さんは結核が再発して病舎に入れられたそうだ。「連続懲罰攻撃」の結果らしい。

「伝えられる所では、八王子拘置支所の桜庭さんに対する『懲罰』の理由は、極めてささいなものである。房内で桜庭さんが、正面を向かず、後ろ向き

ですわっていたから『後ろ向きでは脱獄等何在工作しているのかわからない』として懲罰を加えている。又、冬の房

内正座で足の凍傷・出血を起し、チリ紙をあてた所、『チリ紙の不正使用』

という常識はずれの理由で懲罰をかけさらにひざの屈伸運動をやったことさえ『懲罰』の口実とされている。こうした一連の懲罰は、何ら根拠のない

「囚人虐待」である。

「懲罰」では、結核をわずらったことのある桜庭さんの私服をはぎとり、冬でも、古くて薄い囚人服を着せ、房内正座させて監視し、凍傷、発熱、発咳を起させ、レントゲンをとって結核の再発状況を観察しながら、懲罰を続行するといふ念の入ったやり方をしてい

る。」

八月 つもったほこりを横目でみつ

つも、動きまわると暑くて死にそうになることをおもうと、どうしてもそう

じする気になれない。そうじはキラ

でもきたないのはもっとキレイだからこまる。本日配達の手紙の束のあいだから、はらはらとちいさな紙がおちた。「お・そ・う・じ・の 定期便!!」とある。なに? 「もう、お掃除は買う時代です。月に一回以上プロが掃除を行ないます。殺菌も兼ねているので衛生的です。日頃のお手入れが楽になります。」へえ、とおもってウラ返す。「定期清掃サービス実施中!! 台所はこまめに手入れしていれば長持ちする上、衛生的です。でも大型換気扇、レンジフードなどの普及で、お台所の掃除が奥様の手に負えなくなってきました。でもご安心。お掃除はもうプロにまかせの時代です。料金は月々八〇〇〇円より、お客様の要望により、各種組合せが可能です。その他のサービスもあります!! 臨時の大掃除、草取り、修理、修繕、ペンキ塗り、内装工事、引越等々、生活に密着したサービスをおこなっています。ぜひ、お気軽にお

電話下さい。03-322-3455

べんり屋「アトム・シテイ」グループ本部シテイ・サービス・ネットワーク株式会社「こちらの弱味につけこんだアンドロイドの侵略の一種ではないでしょうね。まさか、ね。」

八月二十四日 北の方から風がきて一夜のうちにならずしくなった。自然はスゴいなあとおもうのはこういうときだ。すずしくなったらそうじしようとおもっていたけど、久しぶりのすずしさを味わうほうが先で、やっぱりきょうもそうじはしなかった。毎日かかさず、これだけは読む朝日新聞のきょうの天気(どうしてこんなに天気予報がすぎなんだろう?)のきょうの記述。

「オホーツク海の高気圧が、北日本を広く覆っている。そこからの北東気流が、北日本から東日本にかけて、一時雨含みの晩夏をもたらしている。炎熱続きだったところに、この涼しさは一息つかせてくれるが、油断していると

夏バテが現れる。一日の日程がどことなくしまらず、生活のダイヤルが狂いがちにならないように、日課をきちんと消化していこう。」きょうは家中出は

らっている。そうじ以外の日課は、まあ消化して、ひとり静かな午後はギネスを片手に、ドリス・レッシングの長い小説「黄金のノート」を読む。昔何かの本で、朝食にはギネスを注文して飲むというのを読んで、一度それをやってみたいと思った。消化するべき日課が次から次へと果てしない生活のダイヤルに、そういうメニューは入りこむ余地がない。でもブラックホールのような、ウソみたいに優雅なつかの間、の午後はぽっかりとあるのだった。オホーツクからの北東気流とギネスと「黄金のノート」のおかげで、きょうはだいたいおとくまでゆけた。

八巻美恵

下手の横吹き笛日記

七月二十日 一時よりピクタースタジオ、佐藤勝さん作曲の子どものための歌。

七月二十三日 家族と秋川溪谷である。

七月二十四日 早朝五時に目がさめてしまったので、アジつりに行く。葉山港より出て夕方までつって、金時の火事見舞のような真赤な顔で、クーラー一杯の魚とともに帰宅。夕食の献立、アジのたたき、塩焼き、しめさば。

七月二十五日 十二時半から二時間程、田町のMITスタジオでCM音楽のダビング。夜七時から、NHK509スタジオで大河ドラマ、林光さん作曲の仕事。

七月二十六日 十二時より信濃町ソニースタジオ、映画音楽を二曲録音。両方とも、けっこうはやってる映画音楽らしいが、全く知らない曲である。

七月二十七日 ワセダアバコスタジオ。ドイツのミヒヤエル・エンゲ氏の

「はてしない物語」をミュージカル化し、林光さんと池辺晋一郎さんが音楽を作る。池辺晋一郎さんの部分の録音。パンパイプというアシ製の試験管を何本もならべたような楽器を吹く。一つの音に一本の管が必要なわけで、途中に調子が変わってあり、大変に困って、結局二回にわけて録音してもらう。

七月二十八日 ユーロスピースで、前田由起さん(ポーカル)、前田志津さん(ピアノ)のガッシュウインの歌をきく。植物的なボーカル、直線的なピアノ。夜、金融業の友人宅で麻雀、大敗。

七月二十九日 赤坂バックペイジスタジオ。TBS「音楽の旅はるか」高丈二、香港編の録音。

七月三十日 十時より一時までサウンドシテイススタジオ。大編成のレコーディングだが、部屋が小さい上に音

量の大小があるので、楽器ごとに小部屋におし込められて、おたがいにヘッド・フォンで聞きながら演奏する妙な光景。六時よりワセダのアバコスタジオで、テレビドラマの音楽。女優(フルーティストかな?)の神崎愛さんがフルートを吹き、私がアルトフルートを吹く。

七月三十一日 十一時からMITスタジオ。八木正生さんの作曲、CM音楽録音。二時からNET朝日スタジオ、CM音楽のダビング。

八月一日 一時からサウンドシテイススタジオ。ケーナでなんとか事務機のCM、音符があまり書いていない。何でも良い、好きに吹いてくださいと言われ、好きなように吹いていると、毎回注文がついて、結局何でも良くはない。

八月二日 昼間、NHK502スタジオ、リコーダーの四重奏。まるくやわらかな音、たまにはこういうのも良い。

いな。

八月三日 暑い。休み。フルートを練習しようと思い、楽器を出してみたが、すぐにしまってゴロツと横になりあとは置物のようにそのまま。

夕方、悠治宅へ水牛楽団のリハーサル。八月四日 山谷夏祭りに水牛楽団出演。悠治さん、美恵さんと私の三人だけ。悠治さんの歌を久方ぶりにきく。

一オクターブ高く出たみたいで、どうするのかなと思っていると、最後までそのままおし通してしまふ。えらい。古今亭志ん生の都々逸のような声であった。

演奏中、会場の公園入口でこぜり合いがおこり、お客さんがどつとそちらの方へ殺到する。何人も残っていない。観客を前に続けようかやめようかと、とまどっている。「おう、おう、あんなもんはすぐにおさまる、ほら、ほら続けろ、続けろ」なんて、その場を取りしきる人なんかいたりして、け

っこう面白く演ってきました。

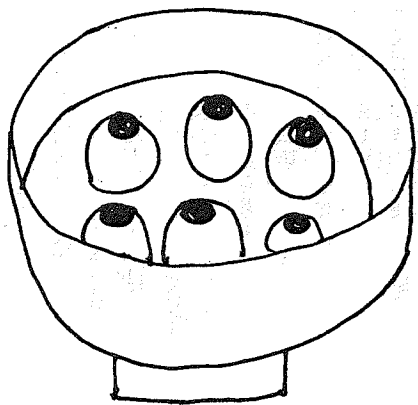
八月六日 六時よりアバコスタジオ。池辺晋一郎さん作曲の劇伴。劇団民芸「セイルスマンの死」の音楽。

八月七日 六時よりNHK509スタジオ、タイの大道芸人の絵につける音楽の録音。悠治さんの作曲。悠治さん、美恵さん、三宅榛名さんと私の四人。美恵さんの吹いた鼻の息で吹く鼻笛が最高。

八月八日 信濃町ソニースタジオ。なんだかわけのわからない物。

八月九日 めまいがしそうに暑いから、明日の仕事をやめて八ヶ岳の知人の家へそかいすることにした。てなわけて今回はろくに仕事もせず、ズルズルとすぎたのでした。夏は暑くて、音の出るものはどうもカンにさわって、いやだねえ。

西沢幸彦



ジヨオオネツノハナア

前回、あんなに江川君を誉めちぎってしまつて、ほんと、私は馬鹿だった。つまり、あの輝かしいオールスター戦の後の地獄の中日戦の江川君の御活躍の程をテレビでじっくり拝見させて頂いた訳だけれども、どうしてこの人はこうも極端から極端に自己を変えることが出来てしまうのだろうかという疑問、苛立ち、怒りで身体中がいつぱいになり、私という一般大衆はこの人のいように翻弄されてしまったのだ。翻弄されたのは何もこの時だけではない。もう何年もだ。そして、これは断言出来るが、これからもずうっと私がジヤイアンツと共にあり、この人がジヤイアンツのメンバーとしてウロウロしている限り翻弄されつづけることであらう。そこで、恐縮ですけど、前回の江川礼讃はウソです。取り消します。あのはなしはなかつたことにしてくだ

ルをバックにうたつたりして珍らしがられたりして帰ろうとしたら山下洋輔さんが、「あのね、なんかいいのありましたか。」「ブルー・モンクなんかどうでしょう。」「とは言えないで、「はあ、なかなかいいものですねえ。」なんてかっこつけたりしてもじもじしていら、「あのね、『エリーゼのために』はどうでしょうかねえ。」「はあ?」「ホラ、ザ・ピーナッツが歌ってたでしょう。ジヨオオネツノハナア!! あれです。」「はあ。」「適当に弾いてますからね、頃合いを見てあなたが『ジヨオオネツノハナア!!』と叫ぶ。そして、あとは自在にドンチャカゆけばいいわけですから。その場で思いついた言葉や叫びを発して進行するとうふうにしたらいと思ひます。」「はあ。で、稽古の方は……。」「一応、『ジヨオオネツノハナア!!』と叫ぶキッカケだけきめておきましょうか。」「優れた人ってほんと、オリジナリティーがあ

さい。で、悪いんですが、前回はなしをもう一回させてもらいます。

ちよつと、いや、かなり前のはなしになります。七月六日の金曜日のことなのですが、大阪の厚生年金ホールで「大阪フィルハーモニー交響楽団」のコンサートがありました。メイキングは山下洋輔さんで、この私も出演者の末席に連なりました。面白いのはこのコンサートの趣旨。メムバーのセクシオン別後援者制設立宣言といったふうなもので、トランペット部門のパトロン、ファゴット部門のパトロン、チエロ部門のパトロンという形のを広く求めるという、何というか、まあ、そんな感じのものであつて、山下洋輔さんの演奏も追真的なものであつて、これもなかなかなだったので、なにはともあれこの日、私は、あの山下洋輔さんとのデュオができるということとで興奮しておりました。はなしは七月三日火曜日にさかのぼりますが、

る。で、七月六日、私はまさに歴史的なこの出たとこ勝負の時間が刻々と近づいて来る恐怖と困惑をタキシード姿に充滿させて上手の袖で顔をひきつけて待っていた。遂に来た。前の曲が終つた。指揮者の中島良史さんが退場する、はずなのだが、あれ? 再び指揮棒を構えているではないか。おや? 髪ふり乱して頑張つちやつてるけど、あの曲は、山下洋輔さんと私のデュオの後の曲じゃないか。とばされちゃつたのだ。デュオはパーになつてしまつたのだ。コンサートが終つてみんなでビールで乾杯した。指揮者の中島さんが、「いやあ、ごめん、ついつい気持がつづいちゃつて。」「高平哲郎さんが、「まあ残念みたいな気もするけど、考えてみたら、あそこでエリーゼのためにが入つたらテムポがなくなつたね。あれでよかつたんだねえ。」「山下洋輔さんが、「後半のノリがグングン来ましたし、そうです、あれでよかつたのです。」

私はこの日、新宿の厚生年金ホールの楽屋で、この催しの構成・演出の高平哲郎さんから山下洋輔さんを紹介して頂いたのです。温和な感じの方でした。この日はこの催しの稽古をする日で、チャンバラトリオの面々や林家こぶ平さんなどもいらつちやつていて、私も寸劇の稽古なんかやつたりして、終つたから帰ろうとしたら山下洋輔さんが、「あのね、なんかデュオっぽいのがありませんか。中味などについては大阪に行つた時になにするとしてあなたもなんかいいのあつたら考えておいてください。では、大阪で会いましょう。」「何か私はレコード屋に行つた。モンクを買つた。そして、ブルー・モンクを覚えて思いつきの言葉で一応歌えるようにしたりして大阪に行つたのであります。七月五日の木曜日、大阪フィルの稽古場で山下洋輔さんは白熱の稽古を終えた。私もいつも酔っぱらうとやるワンパターンの座興をなんと大ファイ

たのです。」

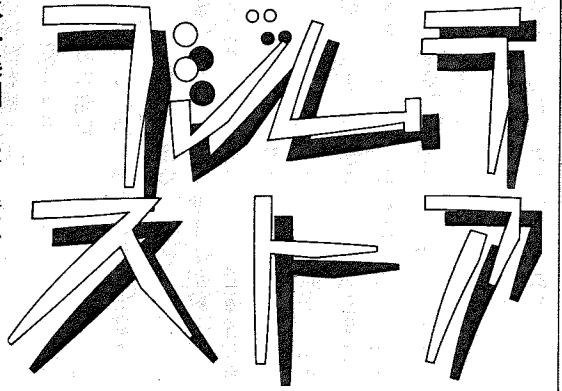
そんなこんなで八月についての余白がなくなつちやつた。今年の八・一五敗戦コンサートは去年やつた「日本国憲法」をうたうということと、木島始さんの「日本共和国初代大統領への手紙」という長い詩を演じた。難しい詩だった。しかし我々参加者はちつとも難しい詩だと思つてないふうになつた。難しい難しいとばかり思つてた日には脳ミソがムズガユクなつてしまふぜよ。

斎藤晴彦

編集後記

普段、街角や喫茶店で見知らぬ人に呼びかける時は、どういうだろう。「あのう」「ちよっと」とたいていは相手の名前なんかを当然省略する。呼び込みのオッサンなら「そのニイチャン」(とはもう呼ばれないか。オッサンがせいぜいのところだ)だろう。「オメガネさん」という女だっている。
ジャマイカ人は、幾つもの呼び方を持っている。一番多いのが「サー」これはアメリカイギリスから、インド、東南アジアまで英語圏で一番一般的。同様に「ミスター」。そして中国人と見るから「ミスター・チン」。今回びっくりしたのは「ヘイ・ボデイ」。はじめ何を言われてるか、と思ったがこれも呼びかけには違いない。さしずめ「おい、オッチャン」だろうか。ニューヨークで白人のアメリカ人に聞いたら「たしかに、アメリカでもそう呼ばなくもないが、ここでそういう時は、ホモの人が仲間を呼ぶのにその言葉を使う時があるから気をつけた方がいい」といわれた。ジャマイカでは女性までがそう呼んでたから、ホモのはずでもないかな？

(田)



水牛楽団+矢川澄子+如月小春
定価二三〇〇円(送料サービス)
夜這いの曲 しずくの曲 祖母
のうた 最後のノート だるま
さん千字文 ワルシヤワ労働歌
花巻農学校精神歌 ボクハソ
ンケイスル 都市 ★編集部あ
て郵便振替で申し込んで下さい

*予約購読の申し込みと送金は郵便振替を利用してください。

口座名 水牛編集委員会
口座番号 東京四一九一七九二

購読料 一年分三〇〇〇円(送料共)
住所、氏名、電話番号、何号からと明記。

*本誌は次の書店にあります。

横濱書(新宿) ☎三五二一三五五七

ブックイン(阿佐谷) ☎三三〇一七八九七

信愛書店(西荻窪) ☎三三三二四九六一

ワンラブブックス(下北沢) ☎四一一一八三〇二

アール・ヴィヴァン(西武池袋店12F)

カンカンボア(西武渋谷店B館B1)

ストアデイズ(六本木ウエイブ4F)

名古屋ウニタ書店 ☎七三二一三三八〇

水牛通信 第六巻第九号

一九八四年九月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三(四二五) 九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ